

A 語句の意味と読み

- (1) 女性の美しさ（美人を手に入れること）を、何よりも大切にしていたということ。／「色」＝女性の美しさ
- (2) 国をかたむける（ほろぼす）ほどの絶世の美女。／「国を傾ける」が、そのまま美女をさす語になった
- (3) 生まれつきそなわった美しさ（美貌）。／「天生」＝天が生んだ＝生まれつき
- (4) ある朝。ある日。ひとたび。／「一朝一夕」と同じ「一朝」。ここは「ある日・ひとたび」の意
- (5) もとは、おしろい（粉）とまゆずみ（黛）＝化粧の道具。ここでは、化粧をした後宮の女性たちをたとえている。／道具で、それを使う人をたとえる言い方
- (6) 七夕。牽牛（けんぎゅう）と織女（しよくじょ）が、年に一度だけ会うとされる夜。／★二人が永遠の愛を誓う夜としてふさわしい日
- (7) 細く長く続いて、いつまでも絶えないようす。／「綿」＝糸が長く続くイメージ

B 句法

- (8) 逆接（の確定条件）。「ども」の上の「求むれ」が已然形だから。＝求めたけれども、得られなかった。／已然形＋「ども（ど）」で逆接の確定条件。ここは下二段「求む」の已然形「求むれ」に付いている
- (9) 再読文字。「いまだ～ず」と二度読み、「まだ～ない」の意。ここは「（世間の）人はまだ知らなかった」。／★ほかに将・且・当・応・宜・須・猶・盡など
- (10) 「難シ」で「～しにくい・～するのがむずかしい」の意。返り点は「難」に二点、「棄」に一点を付ける（難〔二〕自棄〔一〕）。自→棄→難の順に読み、二字以上さかのぼって返るのでレ点は使えない。読みは本文どおり「自ら棄て難く」。／反対の「易（やす）シ」＝～しやすいとセットで覚える。一字だけ返るときがレ点、二字以上返るときが一・二点
- (11) 已然形「すれ」＋「ば」で、順接の確定条件。ここは「～するといつも」という恒常条件にあたる。※教科書によっては「～すると」と仮定ふうに説明することもあるので、お使い

いの教科書の説明に合わせることを。／★未然形＋「ば」（仮定条件）との区別が頻出

- (12) 願望（どうか～したい・～してほしい）を表す。文末は⑭の「為らん」のように「～ん（む）」で結ぶ。／「願ハクハ～ント」の形で覚える
- (13) 推量の助動詞「む（ん）」で、「～だろう」の意。※「無し」は状態を表す形容詞なので、ここに意志の「む」は付かない。文末の「ん」は推量と判断してよい。／「無し」＋「ん」＝「ないだろう」

C 主語・指す内容

- (14) （楊貴妃の）天生の麗質＝生まれつきそなわった美しさ。「自ら棄て難し」の主語は人ではなく「麗質」で、そのまま埋もれさせておくことができなかった、の意。※「自」を「おのずと（棄てられない）」と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせることを。／主語は直前の「天生の麗質」。人を主語にすると訳が通らない
- (15) 唐の玄宗皇帝。（詩の書き出しでは「漢皇」と呼ばれている人物）／詩の書き出しの「漢皇」と同じ人物をさす
- (16) 玄宗皇帝と楊貴妃、二人の心。／別れぎわに誓いを交わしたのは二人だけ、という場面
- (17) 玄宗皇帝と楊貴妃が、七月七日の夜、長生殿で交わした誓いの言葉。（詩の中では、楊貴妃の魂がたずねてきた道士に託して伝えている）／七月七日の夜、長生殿でのささやき。それを楊貴妃の魂が道士に託している

D 口語訳

- (18) （絶世の美女を）求めたけれども、得られなかった。／「求むれ＋ども」＝逆接、「得ず」＝得られなかった
- (19) （楊貴妃が）ひとみをめぐらしてにっこり笑うと、あふれるほどの愛らしさ・なまめかしさが生まれ、／「一笑すれば」＝にっこり笑うと、「百媚生じ」＝あふれる愛らしさが生まれ
- (20) 後宮にいる化粧をした女性たちは、（彼女とくらべると）まるで色あせて見えてしまった。／「粉黛」＝化粧をした女性たち、「顔色無し」＝色あせて見える
- (21) この（別れの）恨みは、いつまでも長く続いて、絶えるときがないだろう。／「綿綿」＝長く続く、「期無からん」＝時がないだろう

E 内容・記述

(22) 後宮の三千人の中で、皇帝の愛を一身に独占する立場。(二十五字) / 「三千」と「一身」の数の対比が答えの骨

(23) どちらも「二つがそろって、はじめて一つになる」もので、決して離れない深い男女の愛を表している。ここから「比翼連理(ひよくれんり)」という言葉が生まれた。 / 比翼の鳥も連理の枝も、単独では成り立たない点が共通

(24) 「長恨」＝長く続く、いつまでも消えない恨み(深い悲しみ・心残り)の意。この最後の一句が題名の意味をそのまま言いあらわし、詩全体をしめくくっている。 / 「長恨」＝長く消えない恨み

(25) 前半は寵愛を独占する幸福な日々、後半は死別し、誓いの言葉だけが残る悲しみ。(三十七字) / (中略)の間に安史の乱と死別が起きている

F 文学史

(26) 白居易(はくきょい)。字は楽天で、「白楽天」とも呼ばれる。中唐の詩人(七七二～八四六年)。 / 平易でわかりやすい詩風。日本でも『白氏文集』が愛読された

(27) 七言古詩。全百二十句。 / 一句が七字。句数の決まっていない古体詩

(28) 桐壺(第一帖)。帝(桐壺帝)と桐壺更衣が、玄宗皇帝と楊貴妃に重ねて描かれている。 / ★『桐壺』には、絵に描かれた「長恨歌」を見て嘆く場面がある

【現代語訳(全文)】

漢の皇帝(＝玄宗)は女性の美しさを何より大切に、国をかたむけるほどの絶世の美女を求めている。天下を治めて長い年月がたったが、求めても得られなかった。

楊家に一人の娘がいて、ちょうど年ごろになったばかりであった。家の奥深い部屋で大切に育てられていて、世間の人はまだだれも知らなかった。

生まれつきの美しさは、そのまま埋もれさせておくことができず、ある日、選ばれて皇帝のおそばに上がった。

(楊貴妃が)ひとみをめぐらしてにっこり笑うと、あふれるほどの愛らしさ・なまめかしさが生まれ、後宮の化粧をした女性たちは、(彼女とくらべると)まるで色あせて見えてしまった。

(中略)

皇帝の歓心を受け、宴席にはべって、ひまなときとてなく、春は春の遊びのお供をし、夜は夜で皇帝をひとりじめにした。後宮には美しい女性が三千人もいたが、その三千人分の寵愛が、彼女ひとりの身に集まっていた。

(中略)

別れぎわに、(楊貴妃の魂は)心をこめて、重ねて言葉を託した。その言葉の中には誓いがあって、二人の心だけが知っているものであった。

「七月七日、長生殿で、夜ふけにだれもいない、二人だけでささやき合ったとき(に、こう誓ったのです)。天上に生まれ変わるならば、どうか比翼の鳥になりたい。地上に生まれ変わるならば、どうか連理の枝になりたい、と。」

天は長く地は久しいものだが、それでもいつかは尽きるときがあろう。しかしこの(別れの)恨みは、いつまでも長く続いて、絶えるときがないだろう。